写真の中で

みりん

僕に会った時、里香は大きな目いっぱいに涙を浮かべていた。思わずぎょっとしてしまった僕の前で、堪え切れなくなった涙が頬を伝うと、ついに彼女は顔を歪めて泣き始めた。透明なはずのそれは里香の目と同じく薄い色素を帯びていて、両目から瞳の色が抜け落ちていくような錯覚を覚える。こんなことは長い付き合いの中で初めてで、僕は呆然と彼女の傍で突っ立っていることしか出来なかった。

里香が泣かなくなったのは、確か彼女の母親が病気で亡くなってからだ。僕も里香も十歳になって間もない頃だった。それまではちょっとしたことですぐに泣く、泣き虫の部類に入る子供だったように思う。そんな里香が、まだまだ母親に甘えたい盛りであろう少女が、葬式の時ですら涙を見せなかったのだ。目元が微かに赤くなっていたものの、里香は終始唇を結んでまっすぐ前を向いていた。

この日から、僕は里香の泣き顔を見たことがない。里香が人前で泣かなくなったのは、彼女の父親や家族ぐるみの付き合いだった僕の両親を含む、周囲の人々を心配させないためだったに違いない。けれど周りに気を遣いすぎてしまう里香は、このままでは壊れてしまうような気がした。

「里香の思ったこと、何でも聞くから僕に話してほしいんだ」

幼いながらも一生懸命考えてこう言ったことを覚えている。

それを聞いた里香が微かに目を見開いて、その目が少し潤んだことも。

「ありがとう」

少し経ってから妙に大人びた表情でそう言ってくれたことも。それから里香と僕は何でも話し合える、本当の家族のようになった。

里香の目に見える変化はもう一つあって、それは今まで肩の辺りで切り揃えていた髪を伸ばし始めたことだ。初めは単に気分を変えるためだと思っていた。しかし髪を難なく結い上げられる長さになった時、その姿が亡くなった彼女の母親によく似ていることに気付いた。母親代わりとして学校が終わるとランドセルを背負ったまま幼稚園に通う妹を迎えに行き、家でもずっと面倒を見ていた里香。彼女が外見だけでも母親に近付こうとしているのは明らかだった。そして恐らく里香が、妹に寂しい想いをさせたくなかったであろうことも何となく理解できた。僕は里香が泣かないようにひっそりと、だけどより一層支えることを決めたのだ。

十数年ぶりに涙を見せた里香は翌日も、その翌日も、

そのまた翌日も僕に会う度に泣いていた。手で顔を覆って嗚咽すら漏らさず泣き続ける姿が酷く痛々しい。未だに誰にも自分の胸の内を話さず、一人で泣き続ける里香は見ていられなかった。

何か言葉をかけたかった。けれど今の彼女にはどんな言葉も慰めにならないように感じたし、結局里香を泣かせてしまった僕が一体何を言えるだろうか。そう思うと僕はただ里香が早く立ち直ることを祈るしかなかった。

今日も里香はぼろぼろ涙を流し続けて泣き止んではくれない。

暫く経った頃、里香は以前ほど僕の前で泣かなくなった。目元の泣き腫らした痕は引いてきたが、同時に髪の艶がなくなってしまった。母さんはいつも髪が綺麗だったから、と毎日手入れを欠かさなかったというのに。その上頬がこけてぐっと痩せたようだった。そんな里香の様子に胸が痛んだが、その代わり彼女はぽつぽつと僕に話しかけてくれるようになった。と言っても短い言葉か時折僕の名前などを呟くといった感じで、とても話しかけているとは言えない。それなのに里香はよく言葉が詰まって鼻声になった。こんなのはちっとも里香らしくなくて、無理しているのがすぐ分かる。けれど、それでもずっと泣かれるよりは遥かに良かった。

里香は泣かなくなった代わりに、母親の葬式から暫く経っても時折感情が不安定になることがあった。それでも誰かの前では変わらず元気にふるまい、僕の前ではそんな心境を静かに語った。僕は長く話すことが苦手な口下手だったから良い話し相手ではなかっただろうに、変わらず相談してくれた。やがてそんなことも徐々に少なくなっていき、中学に上がる頃には完全になくなっていた。

里香は着実に変わっているのに、今も昔も僕は口下手だ。けれど、僕は今も昔も里香が元気でいられることを一番に考えている。立ち直るまでにどれだけ時間がかかるか分からないけれど、それまで、せめて君の気が楽になるまでは、何時間だって君の話を聞いていよう。

今日も僕はぽつぽつと語られる里香の話に耳を傾ける。

この頃の里香はにこにことよく笑うようになってきて、以前ほどではないが僕にも話しかけてくれる。顔色もずっと良くなって、背中まであった髪を少し切っていた。毛先が結構痛んじゃったから、と何でもないことのように言っていた彼女はそれで気分が軽くなったらしく、話題も明るいものになっていた。最近見つけたカフェが一番のお気に入りになった、心配していた科目の評価が思ったよりも良かった。気になる人がいる。そんな他愛もないことを話してくれた。

病弱で学校を休みがちだった僕のために、里香がその

日学校で起こったことも話してくれるようになったのは出会ってすぐからだった。話題は大抵、友達とこんなことをして遊んで楽しかったとか、飼育小屋の動物が可愛いとか、ごくごく普通のことだった。それなのに里香が目を輝かせて楽しそうに話す様子を見ていると、その時の里香の表情が目に浮かんで自然と頬が緩んだ。

小さい頃から何でも話すようになってきた僕たちだけど、僕は里香に話していないことがある。里香には思いも寄らないだろう。里香が笑っていてくれること。ずっと前から、こんな単純なことが僕の支えになっていたこと。僕は君と違って何かを伝えることが下手だけど、このことだけは君に伝わっていてほしいと願っていること。

今日も里香はにこにこと笑っている。

どたどたと隣の部屋から慌ただしい音がする。古いマンションなので、少し騒ぐと近隣に筒抜けになってしまうのだ。今日は確か大事な用事があったはずだ。そんなに慌てるならもっと余裕を持って起きればいいのに、と何度言ったか知れない。

隣から玄関を閉める音とほぼ同時に我が家のチャイムが鳴る。華やかな衣装に身を包んだ姉が扉を開けると、里香は挨拶も簡単に済ませて遅くなってごめんなさいと詫びた。里香ちゃんのことだからこうなると思っていたよと笑う姉に、里香は勢いよく頭を下げたらしい。

「そんなに頭下げたら髪がぐしゃぐしゃになっちゃうじゃない。ちょっと来て、直すから」

「え、でも」

「良いから。新婦さんがそれじゃ困るでしょう」

「それじゃあ、お言葉に甘えて」

リビングの椅子に里香を座らせた姉は手早く彼女の長い髪を整えていく。ちょっとした話の合間でも、里香はいつもと変わらず元気そうに笑っていた。この様子なら緊張はしていないようだ。

ほどなくして、綺麗に髪を整えてもらった里香が姉と僕の前を横切って玄関に向かった。

いってらっしゃい。そして幸せに。

今日も僕は、写真の中で、君を見守っています。